

(報告書の概要)

脳科学総合研究センター (BSI) は世界の最も顕著で活動的な脳科学拠点のひとつとして広く認識されるに至っている。脳科学の特性に鑑み、BSI は時限のプロジェクトではなく、長く続くべきものである。前回の脳科学総合研究センターアドバイザー・カウンシルの勧告に対する BSI の対応に満足しており、特に、1)外部資金獲得額の増加、2)研究室のターンオーバーの実績、3)新実験動物施設建設は評価できる。

1. 研究室レビューとターンオーバーについて

- ・世界上位 5%の組織となるには、1)卓越した若手研究者を新規採用し続けること、2)最高レベルのシニア研究者を留めること、の両方が必要である。
- ・BSI 設立以来 2010 年末までに 24 研究室が終了することは健全である。引き続き適切なターンオーバーを確保すべきである。
- ・研究室レビューに当たってはインパクトファクターと論文数のような硬直化した基準は避け、脳科学の多様性に対応し分野の特徴を考慮すべきである。転出の容易さに鑑み 5 年目のレビューは重要であろう。
- ・BSI が限られた研究室主宰者 (PI) へ長期の任期を付与することは良いことである。これらの PI には BSI の将来を担い、若手 PI のメンターとなることを期待し、そのような観点から選考されるべきである。

2. 組織について

- ・現在のコア体制には「脳を創る分野」と「脳を育む分野」が明記されていない。複数のコアに分散した計算論的脳科学の研究室をつなぐ努力が必要である。また、「脳を育む分野」への配慮を継続する必要がある。グループ体制を廃し、フラットな組織を薦める。
- ・若手 PI の意見を BSI 運営に反映させるため、互選による少数の委員による委員会の設置を薦める。女性研究者の PI への登用が進み素晴らしい。努力を続けて欲しい。

3. 研究費とその配分について

- ・BSI の予算がさらに減少することのないよう望む。外部研究資金獲得額を大幅に増やしたことは素晴らしく、引き続き努力すべきである。しかし、外部資金獲得のために BSI の基礎研究重視の体制をゆがめることがあってはいけない。
- ・研究費を不均等に配分する方針を支持する。しかし、配分に当たってはインパクトファクターや引用数等だけによる機械的な基準は避け、分野ごとの評価、発見の歴史的価値による配分を行うべきである。

4. 大学院学生の教育について

- ・大学院生は研究に活力と創造性をもたらすこと、また BSI は次世代研究者育成への責任が

あることから、より多くの大学院学生を研究に参加させるべきである。いくつかの連携大学院が組まれているが、全てのPIが含まれているわけではなく、若手や外国人PIには大学院生のリクルートに困難を感じている者も多い。

- ・国内大学と協力して最高レベルの学生を集める脳科学専門の大学院プログラムを作ることを薦める。そのプログラムでは、学生をBSI全体で募集して採用し、学生はどの研究室へも参加できるようにすべきである。

5. 国際化について

- ・BSIは外国人研究者の採用を進めており、今後もこの努力を継続すべきである。採用後の体制作りも重要である。BSIでは、少なくとも外国人が一人でもいる場面では、必ず英語が用いられるべきである。テクニカルスタッフと事務職員の英語力が不足しているため、採用基準のひとつに英語ができることを入れるか、あるいは採用後に英語研修を行うべきである。

- ・託児所設置は大変すばらしく、さらに拡大すべきである。インターナショナルスクールが遠方にしかないのは大きな制約であるため、近隣への誘致に挑戦すべきである。

6. BSI内外での連携研究について

- ・BSI内での連携体制を推進することに概ね成功しているが、更に努力する余地がある。オリンパスおよびトヨタとの連携センターの設置は素晴らしい。

- ・基幹研究所とのイメージング技術開発などにおける協力や神戸研究所のPETグループ等との協力の推進はBSIにメリットがあると思われ、評価できる。

- ・国際ニューロインフォマティクス統合機構などにおいてBSIが果たした役割は素晴らしい。

BSIは世界の少なくとも上位10%の脳科学研究機関になった。これからの10年でBSIは世界の一握りの上位機関を目指すべきである。MITの脳科学を世界の上位5%に押し上げた利根川進次期センター長の指導力に期待する。

(委員リスト)

Sten Grillner (Karolinska Institutet) Chair

Heinrich Betz (Max-Planck Institute)

川人光男 (株式会社国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所)

Stephen F. Heinemann (Salk Institute)

金澤一郎 (日本学術会議議長)

Lynn T. Landmesser (Case Western Reserve University)

宮下保司 (国立大学法人東京大学大学院医学系研究科)

Richard G. M. Morris (The University of Edinburgh)

William Thomas Newsome (Stanford University)

岡野栄之 (慶應義塾大学大学院医学研究科)

Mu-ming Poo (University of California at Berkeley)

Janet F. Werker (University of British Columbia)

Torsten N. Wiesel (The Rockefeller University/
International Human Frontier Science Program Organization)
David Willshaw (The University of Edinburgh)